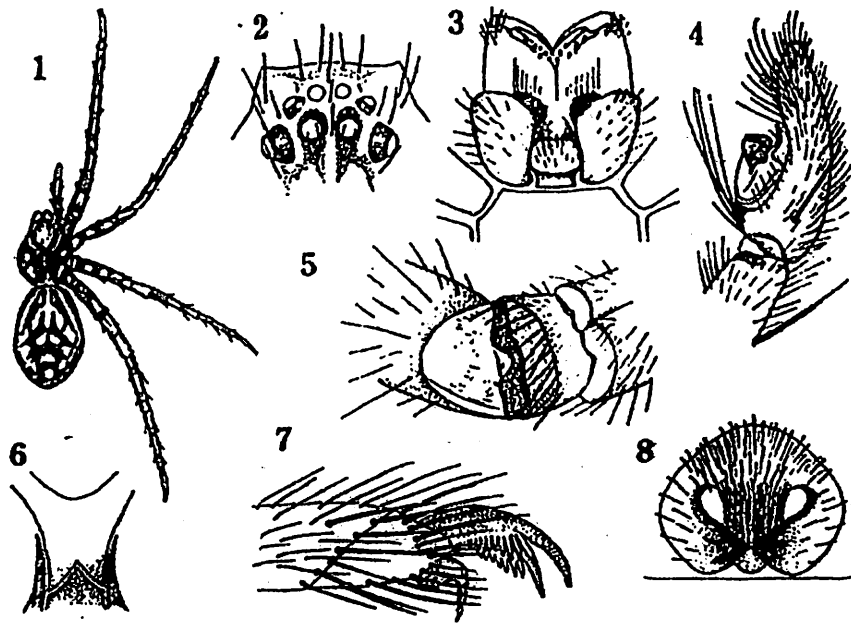


しのびぐも

第 2 号



Cispius orientalis sp. nov.

1974

三 重 ク 毛 談 話 会

し の び ぐ も

第 2 号

1974

伊勢神宮の珍蜘蛛キノボリトタテグモと キシウエトタテグモについて	孫福正	1.
アリグモ等の擬態について	松本誠治	4.
蜘蛛あれこれ	水谷慶治	6.
NHK番組制作に協力して	橋本理市	10.
三重県南部地方の真正蜘蛛類 目録(追加)	貝登憲治	12.

東亜蜘蛛学会第7回全国大会、三重県にて開催決定		18.
会員名簿		19.
昭和49年度決算報告		20.

三 重 ぐ も 談 話 会

表紙説明

Cispius orientalis YAGINUMA
シビグモ (キシググモ科)

4-V-1965, 三重県三重大学平倉演習林
(志保美杉村川上)にて橋本理希氏が最初
に採集。新種として記載された。
図は八木沼健夫氏の御好意により、
ACTA ARACHNOLOGICA Vol. 20
No. 2 より転写したもの

1. Dorsal view (♀)
2. Eye area... (♀)
3. Mouth part (♀)
4. palp (♂)
5. Trochanter (♀)
6. Pedicel (♀)
7. Omychium and claws (♀)
8. Epigynum (♀)

伊勢神宮の珍蜘蛛キノボリトタテグモと、
キシノウエトタテグモについて

孫 福 正

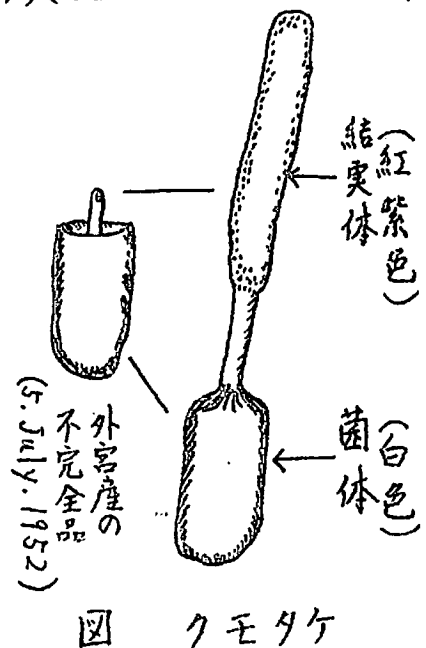
現在、伊勢神宮から表題のようにトタテグモの仲間が二種知られている。最初に神宮の調査をされた植賀安平先生も、これを見落とされていた。筆者は植村利夫先生がまだ和歌山県に居られ、同好会をつかって、「紀州の動植物」を発行されていた頃、三重県のかもをやってくれなにかということで、ちょっと手を出したのが始まりで、管ひんバンドを腹に巻いて採集に出かけ、よく猟師とまらひえられたことを思い出す。1936年4月には東亜蜘蛛学会が誕生して、県下唯一の創立会員として名を連ねた。ところが筆者は当時、相当コケの研究調査に熱かはいってきっていたので、恩師植賀先生に神宮のかも調査をおすすめして、併せて植村先生を紹介した。ここで県下のかも類の研究は本格的にはじまったのである。

さて、話は前にもとって、筆者は1949年から伊勢神宮(特に、外宮、内宮)のコケの調査研究をはじめ、1950年頃からたびたび樹幹上の蘚座から、キノボリトタテグモの巣袋と成体を得た。しかし、正確な記録はもう少し後の1952年7月2日(外宮神苑)になる。同年7月19日付、中部日本新聞は「神宮域からトタテグモ、孫福明倫小学校教員が発見」という表題で、外宮域でキノボリトタテグモが発見されたことを報じている。本県で最初に本種の巣袋を見つけたのは、1942年9月8日、現在の伊勢市宮山小学校近くの、民家の畑にある一抱え程の太さのカキの基部、30cm位の高さにあるEntodon ツヤゴケの蘚座中であつた。その後は北勢の夕媛神社、南勢の朝熊山麓、紀伊で得ているし、橋本先生の伊賀の記録等からみると、全県下に分布していることが推測できる。筆者の経験からすると、樹幹や石垣のような垂直な岩面に、コケが密生しているところを選び、ナイフ様のもので面に沿って

はざとり、そのコケの着生していた側をみると、居ればすぐ葉袋が目につくから大変簡単に採集出来る。これがコケ採集から生まれた孫福式採集法である。

キシノウエトタテグモの成体には、きのこ類のクモタケがよく寄生し、くもを殺し、その屍を埋蔵している肉質の白い菌体から上に円柱状の結実体を出し、長い頭部には紅紫色で乾燥した粉状の分生子を密生する。6~7月のつゆの頃、くもの葉袋の戸を押しおけて結実体が突きでてくる。キシノウエトタテグモの葉袋を発見することはなかなかむずかしいから、住んでいそうな地域でつゆの頃クモタケを発見することが逆道かも知れない。筆者は常に口ぐせのようにいって、くもをやる者はくもだけ知っておればよいのではなく、この例のように植物も知っているが大変有利なことがある。コケをやるものは岩石を、昆虫をやるものは植物を……皆同様である。今回伊勢神宮からキシノウエトタテグモが発見されたのも、やはりクモタケからなのである。

筆者は神宮が生物調査を計画実施していた頃(1952年7月5日土曜日夕方)、外宮入口神苑の半月形の植込みの中の一つから、クモタケと思われる結実体の殆ど發育していない不完全品を得たが、当時まだキシノウエトタテグモを採集していなかったので、クモタケと断定することは出来ず、慎重を期し、川村著の原色版日本菌類図説のクモタケの図版のページに、右図のような写生図をかいて記録にとどめ、発表は差し控え



た。それから神宮のフケ調査に時間をとられ、これを解明
することが出来なかった。ところが昨年、皇学館高校の中馬千鶴
先生と、内宮古殿のかや葺上の地衣やフケ調査に出かけた
とき(1974年6月25日)、同氏が石垣の間の土の中から何か
妙なものが出ていると教えてくれたので、みたところすぐクモ
タケであることがわかった。これが本県に於けるクモタケ最初
の確認の記録である。そこで筆者は早速その翌日、外宮へ行
き、石垣を全部調べたところ、やや時期がおそいようであ
ったが、30~40の完全なクモタケをかぞえることが出来た。
同年6月30日に橋本理市先生を外宮の現場に案内し、キ
シノウエトタゲクモ(筆者らが以前にトタゲクモと呼んでいた種
)を確認して貰った。勿論県下初の記録である。

このくもの棲息している石垣は、自然石で組まれたもので、
石と石との間には充分な土があり、土の表面には苔や粉状
の地衣などがみられ、ときには小さい草が生えている程度の
古さを示している。石垣の南側は盛土で埋もれ、東~東
北面は裸出し、南側は樹木が多い。朝のうちは太陽を
受ける場所である。その後橋本先生の尽力により、NHK
のテレビでもその生態が放映された。

今回の採集により、クモタケとキシノウエトタゲクモの両珍
種が、同時に確認されたことは特筆すべきことで、実に筆者
22年来の疑問が解明されたわけで、まことに感銘が深
い。また三重県蜘蛛学会のためにも、ささやかながら寄与でき
たことは満足である。

最後に、中馬、橋本の両先生に御礼を申し上げる。

(12-II-1975)

アリクモ等の擬態について

松本誠治

「擬態」については、我々の認識において、まぎれもない事実である。しかしながら、その認識においても、本質的な理解をしているかという点、そうでもない。アリに擬態しているアリクモを例にとりて述べてみよう。アリクモの形態は、衆知のとおり、頭胸部が頭部と胸部の間、すなわち、第3列眼のうしろでくびれており、一見、アリの様に頭部・胸部・腹部の3部分があるように見える。また、歩脚も、他のハエトリクモとは異なり、毛深くなく、細い。色彩も、よくアリに似ており、黒色を基調として、灰色・赤色をまぜていることもある。体毛も、他のハエトリクモに比べて、少なく、体の色は毛の色によるものでないことがわかる。習性においてもいくらかのアリへの擬態を示す。第1脚をいつも上にあげ、交互に動かしている。その動作は、アリが触角を動かしながら歩くのとよく似ている。このように、形態や行動のアリとの類似の認識は、いわゆる擬態にあてはまるのであるが、これがあくまでも、我々が行なった認識によるのだということを理解しておかねばならない。すなわち、アリやクモが、あるいは他の動物が、我々と同じ認識をし、我々と同じ世界を持っているのではないということだ。擬態については、その関係する2生物間の類似点を大胆にとりあげることが重要であるが、とりあげられた生物については、それらの習性を綿密に調べ、またそれらの生物と関係している他の生物種についても、研究をしていかねばならない。上記アリとアリクモを例にとれば、アリクモがアリに擬態しているのは、アリクモが、アリの群の中に入ってもアリから攻撃をされないためであるとか、アリの卵・蛹などを略奪するのに、アリに近づきやすいためだとかのように、アリ対クモの関係のみをいわれてきた。いまでも、このような解釈

に肯首する人があれば、それは悲しむべきことであり、我々の科学的認識は、こんなものかとなげかざるを得ない。なぜなら、アリの感覚について考えてみれば、すぐにわかることであり、このアリグモのアリへの擬態は、アリとクモとの直接の関係でなく、他の第三者によってクモが、いかたなくあるいは積極的にアリに形態と行動を似せた結論できるからである。アリの感覚について考えてみれば、アリグモが一番よく出あうであろう職蟻は、そのほとんどを触覚と嗅覚にたよっている。擬態しているといわれた原因である形態や行動をみるべき視覚はといえば、王や女王ではともかく、職蟻では貧弱なものでしかない。複眼の個眼数も、複眼の機能と果す程はないといわれる。アリ対クモの直接関係で擬態を云々するならば、形や動作でなく、においとか、アリ同士でみられる触角をふれあわせたり、口吻しなどの種認識法をとるはずであるが、アリグモは少なくともアリ同士にみられるような動作をしないということは明確である。(においについては不明である)。このように考察してくれば、アリグモのアリへの擬態は、アリに対するものでなく、他の何者かに対するものであり、それも視覚のよく発達したものであると予想できる。この正体は、フィールドでの観察によって確認されなければならぬ。アリとアリグモの棲息環境では、両者の出会いは頻繁である。この両者の重なっている棲息環境に入り込み、クモとの交渉を好み、アリとの交渉をさけているような視覚の発達した動物がその正体といえそうであるが、観察をしないで結論を出すことはここではやめよう。

擬態の理由を考える際には、少なくとも前述したように、被擬態者(上記の例ではアリ)の感覚を分析してからでなければならぬ。でない、「アリは一般にクモの敵であるから、似ていけば味方とまちがえられて都合がいい」といふ、安易な因果関係を説くことになってしまおう。

(11-XII-1974)

蜘蛛 あれこれ

水谷 慶治

・ゴッサマー (gossamer)

私はゴッサマーを観察する機会を得ましたのでその結果について報告いたします。

・観察日 昭和49年12月8日 日曜日

・観察時間 午前11時～午後12時

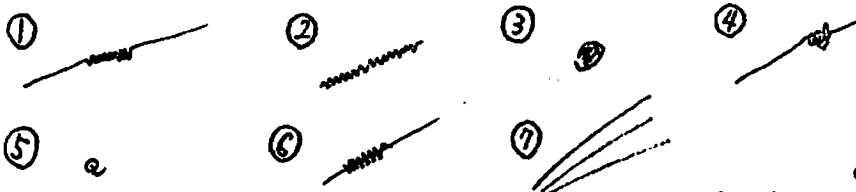
・観察場所 箕田小学校の西の田圃 (三重県鈴鹿市)
[日光の都合で神社の方から観察]

・天候 晴れ時々くもり。北東の風 3~4m/sec.

・結果

・観察されたクモの糸のかたまり数 124個

・クモの糸のかたまりの種類



以上7種が観察されましたが多くみられる型は

③ → ⑥ → ④ → ⑤ → ⑥ → ② → ① → ⑦

の順で、③と④の型が全体の約50%、⑥と②と①の型が約30%、その他の型が約20%でした。⑦の型は2個確認しましたが、太陽光線のため極めて見つけにくく、実際はもっと多いと思います。

・飛びあがる場所 あせ道・稲の株から

・飛びあがりかた。

次の二通りがありました。



5m以上、上昇するものは少なく大抵すぐに落下しました。

15個の白い糸のかたまりを手にとり調べてみましたが残念なが

らクモは / ひきも確認できていませんでした。田の採間に多くの糸のかたまりをみつけました。安養寺でも小学生が確認しており、10.~12月の上旬の天気のおだやかな日にはよく白い糸のかたまりを見かけましたが、あまり気にはかけませんでしたので、見過していることが多いのではないかと思います。ただ規模が大きい小さいかたまりの違いだと思います。

・クモの餌について。

クモを飼育して一番感じるのは、クモの餌をいかに多く集められるかということです。そこで私はクモの研究をしはじめたときから、特にこの点に注意し、少し成果がでてきましたので報告いたします。

1. 自然の餌をとる場合。

春~秋、虫とり器を使用すると簡単に集めることができます。

春……ユスリカ・かかんボ 夏……ウンカ・か・かかんボ
秋……ウンカ・かかんボ・か 冬……もちろん採集できない。

この欠点は、小さいハエ類は体力消耗がはげしく一夜でほとんど死に、ウンカでも2,3日しかもたないこと、餌を与えるのに小さい虫はほとんど逃げてしまうことです。

クモですくう方法も小さいものは集めにくく大変だと思います。もちろん雨ふりはできません。

2. 餌を人工飼育する場合

イ. コオロギの飼育をすれば一年通じて餌が得られます。

- ・秋に産卵させるもの——エンマコオロギ・ツツレサセコオロギ・マダラスズ・シバズズ・スズムシ・ミツカドコオロギ・タンボコオロギ(翌年の春孵化)
- ・春に産卵させるもの——ナツノツツレサセコオロギ・クサヒバリ・マダラスズ・エゾスズ・タンボコオロギ
- ・冬に餌が欲しい場合——ナツノツツレサセコオロギ・エゾスズ・タンボコオロギ・タイワンエンマコオロギを飼育すればよい。秋、冬の間は幼虫のまま越冬します。

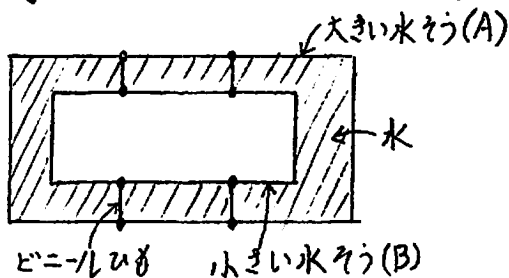
◎利点

- ・コオロギの幼虫は羽がないので逃げのおそれがない。但しジャンプ力があるのでその高さまで周囲を高くする必要がある。
- ・個体の大きさがまばらであるのでクモの体長にあわせたものを与えることができる。
- ・コオロギの飼育はスズムシとほぼ同様で簡単である。
- ・大量飼育が可能(餌は台所の残り物・野菜・くだものくず・葉子類のくずなどでよい。コイ・鳥の餌でもよく、タンパク源はかかんボ・クモ類・昆虫類の死がいでもよいと思います。)

ロ. アリ・ダンゴムシの飼育が割合簡単でたくさん増えます。

アリはハエトリクモ類、ダンゴムシはオオヒメクモの餌になる。

ハ. 簡易ミニ恒温室での餌の飼育。



簡易ミニ恒温室は左図のようになるもので、水そうを大・小2個、サーモスタット付ヒーター(100W)・ヒーター(40W)・ビニールひも4本用意し、AとBをビニールのひもで結びBの水そうが浮かないよう

にし、AとBの水そうの間に水を入れ、サーモスタット付ヒーターを取り付けます。水温を一定にすれば一年中飼育ができます。

- ・恒温室の中へ田畑の土を入れ、そこにコイの餌・くさりかけの物を入れておくと、たくさん的小バエが飼育でき、幼生のクモの餌にできます。
- ・タンボコオロギ・マダラフズ・小昆虫の飼育ができた。
- ・コオロギを飼育したところ、今冬も元気に鳴いており、産卵して、現在数十匹、フ化しています。
- ・応用すればクモの飼育もできるだろうと思います。

・静電気とクモの関係.

下じきをこすって静電気を起こし、これにクモをのせ、細い糸をクモの身体にふれさせて、その様子を観察してみました。

・ハラビロアシナガクモ

少しの放電で身体全体を縮めてはいす。

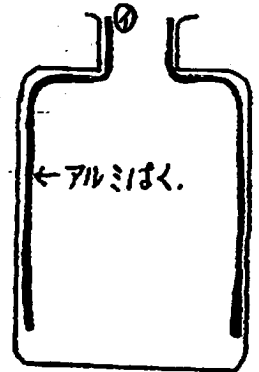
・イエユウレイクモ

身体全体を縮めるが放電が終ると1〜1.5秒ですぐ正常に動き出す。しかし、強いものであると仮死のようになり、しばらくは全然動きません。1〜2mmのクモの幼生の場合、放電させると、4〜5cmとばされます。

・クサクモの子

子クモのまといをしているところへ下じきの静電気を与えると、糸が下じきにひばられて、子クモが一斉に動き出し、それ以上強い場合は死んだまねをする。しかし、同じことをくり返すとあまり反応を示さなくなります。

・右図のようにびんの内側にアルミはくをはり、底へクモを入れて、①の部分へ静電気を与える。下からアルミはくへ近づいたクモは電気のため下へはじきとばされる。少しの静電気だと下へ逃げる。クモは少しの静電気では、あまり反応を示さず放電するくらいのもになると、反応を起こします。子クモは特に反応が強い。



・クモの細部写真撮影の一方法.

写真の焼つけを応用する。引伸し機のネがフィルムをはさむキャリアーに、直接、クモ、あるいはその脚や触肢をはさみ、あとは焼つけと同じ要領で印画紙に拡大して焼つける。クモのある部分は白くうつりますが、かなり精密に焼つけられ、脚の長さや、その割合、とけの数などが調べやすくなります。

同様に、透明か半透明の昆虫の羽根、植物、岩石の細かいもの、薬品の結晶、布なども拡大焼つけできます。

(25-1-1975)

NHK番組制作に協力して

橋本理市

東京のNHKから「レンズはさぐる」で「ワナ」をテーマに番組をつくりたいので、協力してほしい、という電話があったのは、昨年の9月中旬であった。東京にはクモの専門家が沢山いるのに、なんでよりによってこの私に、と思ったが、テレクターのK氏がしばらく名古屋にいて、三重大学とのつながりがあったことが、あとでわかり、なるほどと納得した。

一般的にクモのワナといえば、アミをさすのであろうが、ちょうどこの年の梅雨時に、伊勢市在住のクモの研究家である、孫福正氏から、伊勢神宮外宮の石垣にクモタケがはえていることを知らされ、調べた結果、それがキシノウエトタテグモであることが、わかったこともあり、運がよければ、トタテグモの捕虫が撮映できるのではないかと期待もあって、すすんで協力をひきうけることにした。

9月19～20日の両日にわたり、昼間はナカコガネグモの捕虫をカメラにおさめ、夜は投げなわのオナカグモと待ちぶせのトタテグモを撮映することにした。ナカコガネグモは別として、オナカグモとトタテグモの捕虫をカメラにおさめるのは、はじめてのことで、どのようになるか全くわからなかった。

すでに世代がかわって、幼生ばかりになっているオナカグモは、カメラの対象にするには小さすぎる感じもしたし、戸外では夜風に吹かれてピントがくってしまうし、高速度撮映のために、明るい電球をつけると、熱で条件がかわって、思うように動いてくれないという心配があった。しかし、何とかして、第4脚間にはった粘球のついた糸を投げるころをモノにしたいと、ねばりにねばって、結局、宿舎にしていた古市の麻苆旅館の裏庭のすみこに、アミをかけているのを、うまくとらえることができた。

トタテグモの方は、さらにむつきしかった。というのも、生態が

全然わかっていなかったし、そろそろ冷えこむようになった夜、果して虫を捕えてくれるか。見当もつかなかったからである。夜行性であることは見当をつけていたので、撮映する前日、現場へ出かけて下調べをした。ライトの中で、かすかにすき間をあけて獲物を待ちぶせしている姿をみつけた時には、「これならいける」と思った。そこで、昼間撮映に便利なところで、比較的大きな穴をつくっているクモをみつけておき、夜になって戸をわずかにあけている近くへ、ピンセットでつまんだ小形の昆虫——アリとかコオロギ——をばらして、捕虫のチャンスをつかかった。高速度撮映(1秒500コマ)をするので、カメラをまわしても、戸をあけてくれないと失敗するし、それを心配してフィルムをけちると、ちょうどよいタイミングのとき、カメラが動いていなかったりして、全くハラハラさせられ通した。車はしょっちゅう通るし、人通りもあるところなので、犬の男が4人がかりで、ものものしく撮映をしているのは、人目につき、道ゆく人々が立止まっては質問するし、ついには近くの新聞社の記者まで取材にきたりして、たいへんなことであった。道具の不備や、材料の昆虫の不足で、何度か失敗したあと、コオロギとヤスデを材料にして、決定的瞬間をカメラにおさめた時は、ほとんど飛び上ってよろこびたい気持だった。

10月11日に放映があったが、オナカクモの捕虫のコマ取りと、トクテグモのそののローモーションは、大きな収穫であった。言葉で表現するのはとてつとれない特殊撮影で、貴重な生態をフィルムとして残すことができ、これ以上のよろこびはない。さいわい、NHKの好意で使用済みのフィルムを、もらうことができたので、編集しなおした上で、また機会をみつけて、披露をしたいと考えている。

(14-III-1975)

三重県南部地方の真正蜘蛛類目録 (追加)

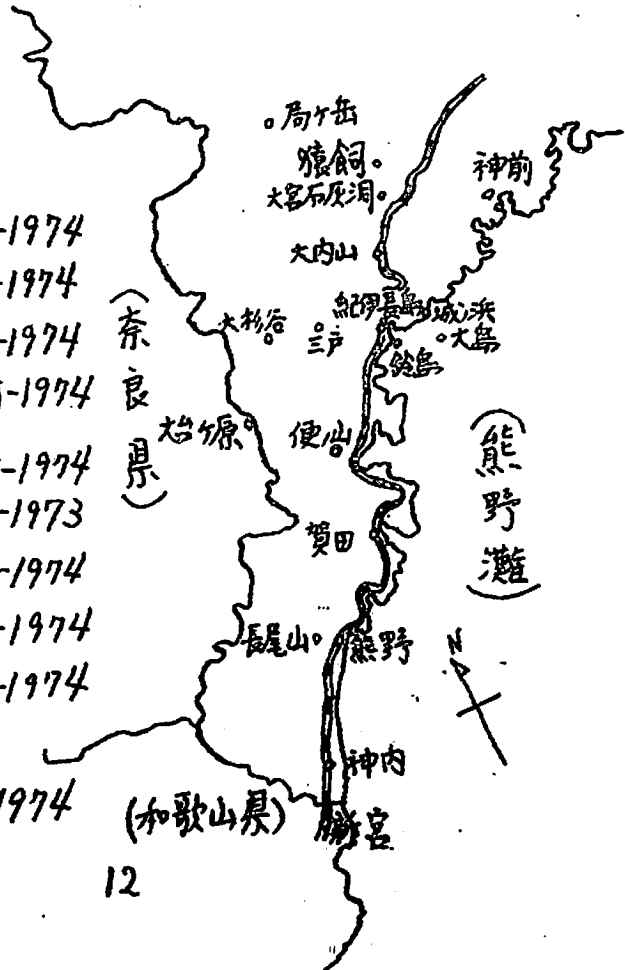
貝 登 憲 治

筆者は1973年12月に「三重県南部地方の真正蜘蛛類目録」として、24科84属159種を發表したが、これは主にビートング法を用いたものであったので、徘徊性のものが少なかった。そこで、昨年の夏休みを利用し、徘徊性のクモに目を向けながら採集を重ねたところ、いくらかの種が新しく採集された。また、1973年に紀伊長島でクモの生態調査を1年間行なったが、その時にも新しく採集されたものがあり、こゝにあわせて追加發表をすることにした。さらに、今までの採集物の中で未同定のものがかなりあるが、同定結果の出たものもあわせて記載し、先に發表した「三重県南部地方の真正蜘蛛類目録」の訂正も行なうことにした。

標本同定にあたり、多大の御尽力をいただいた、八木沼健夫氏・橋本理市氏・田中穂積氏・松本誠治氏に感謝の意を表します。

○今回の採集調査地、調査日は次の通りである。

- 神内(南牟婁郡紀宝町) 22-VII-1974
- 熊野市内 22-VII-1974
- 賀田(尾鷲市) 23-VII-1974
- 便ノ山(北牟婁郡海山町) 23-VII-1974
- 北牟婁郡紀伊長島町内 24-VII-1974
I-1973 ~ VII-1973
- 度会郡大内山村 31-VII-1974
- 神前(度会郡南島町) 1-VIII-1974
- 猿飼(多気郡大台町) 1-VIII-1974
- 大宮石灰洞(度会郡大宮町) 5-II-1974



○目録追加分

1. ウズグモ科

1. マネキグモ
23-VIII-1974 賀田
1-VIII-1974 神前

2. カタハリウズグモ
1-VIII-1974 神前

2. インマグモ科 (Segestriidae)

3. ミヤグモ (*Ariadna lateralis*
KARSCH)
V-1971 紀伊長島 [X]

3. タマゴグモ科

4. ナルトミダニグモ (*Ischnothyreus*
narutomii NAKATSUDI)
23-VIII-1974 賀田
20-VII-1973 紀伊長島 [◎]

4. マシラグモ科 (Leptonetidae)

5. ヨコフマシラグモ (*Leptoneta*
striata OI)
25-III-1973 紀伊長島 [◎]

5. ヤマシログモ科 (Scytodidae)

6. ユカタヤマシログモ (*Scytodes*
thoracica LATREILLE)
VII-1972 紀伊長島

6. ヒメグモ科

7. アシブトヒメグモ
30-IV-1972 便ノ山
7-V-1972 三戸
26-VIII-1973 紀伊長島
25-VIII-1971 大杉谷

8. オナカグモ

- 22-VII-1974 神内
23-VII-1974 賀田
1-VIII-1974 猿飼

9. ホシミドリヒメグモ
23-VIII-1974 便ノ山

10. ホカシミジグモ
26-VIII-1973 紀伊長島 [◎]

11. ヤマトコノハグモ
(*Enoplognatha dorsinotata*
BOESENBERG et STRAND)
23-VII-1974 賀田 [X]
17-IV-1972 紀伊長島 [X]

12. ヒシカタグモ
23-VII-1974 賀田

13. ハラナガヒシカタグモ
22-V-1971 紀伊長島

14. ムラクモヒシカタグモ
(*Episinus caudifer*
DOENITZ et STRAND)
31-VIII-1974 大肉山

15. コンビラヒメグモ
9-VIII-1972 三戸

16. ヤホシヒメグモ
1-VIII-1974 神前

17. ムナボシヒメグモ
22-VII-1974 神内
5-VIII-1972 鈴島
V-1971 紀伊長島 [X]

18. ヨソコフヒメグモ
22-VII-1974 神内
23-VIII-1974 賀田
1-VIII-1974 神前

19. オオヒメグモ
22-VII-1974 神内
23-VIII-1974 賀田

25-Ⅳ-1972 大島

20. タカユヒメグモ (Theridion takayense SAITO)
7-V-1972 三戸

21. ヌノハマヒメグモ
22-Ⅳ-1974 神内
22-V-1971 賀田

7. ホラヒメグモ科 (Nesticidae)

22. アキヨシヒメグモ (Nesticus akiyoshiensis UYEMURA)
5-II-1974 大宮石灰洞 [O]

23. コホラヒメグモ (Nesticus brevipes YAGINUMA)
10-IV-1973 紀伊長島 [O]

8. サラグモ科
24. ヘリジロサラグモ
23-VII-1974 賀田
7-V-1972 三戸
25-VII-1971 大杉谷 [X]

25. クスミサラグモ (Neolinypbia fusca O₁)
22-VII-1974 神内
22-VII-1974 熊野
16-V-1971 便ノ山
22-V-1971 紀伊長島 [O]

9. コサラグモ科
26. セスジアカムネグモ
22-VII-1974 神内
23-VII-1974 賀田

27. ノコギリヒサグモ (Erigone prominens)

BOESENBERG et STRAND
10-VII-1973 紀伊長島 [O]

28. オオサカアカムネグモ (Oedothorax osakaensis O₁)
1-VIII-1974 神前 [O]

29. ヨツボシアカムネグモ (Strandella quadrimaculata UYEMURA)
22-VII-1974 神内
23-VII-1974 賀田

10. センショウグモ科

30. センショウグモ
23-VII-1974 便ノ山

11. コかネグモ科

31. ヤミイロオニグモ
22-VII-1974 熊野
25-VIII-1972 大島

32. ヘリジロオニグモ
27-VIII-1972 紀伊長島
23-VII-1974 賀田

33. トカリオニグモ
22-VII-1974 熊野
23-VII-1974 賀田
31-VII-1974 大内山
25-VIII-1971 大杉谷
1-VIII-1974 猿飼

34. ヌサオニグモ
22-VII-1974 熊野

35. ワキグロサツマノミグモ
22-VII-1974 熊野

36. サツマノミグモ
31-VII-1974 大内山

37. シロスジショウジョウグモ (Singa sanguinea)

- C. Koch) 31-VIII-1974 大内山 [X]
38. ナカゴカネグモ 1-VIII-1974 神前
39. ギンメッキゴミグモ 22-VII-1974 神前
22-VIII-1974 熊野
40. ヤマトゴミグモ 22-VIII-1974 神内
41. ヤマゴミグモ 23-VIII-1974 賀田
42. コミグモ 22-VII-1974 神内
43. ヨツデゴミグモ 22-VIII-1974 熊野
44. アカイロトリノフンダマシ 22-VIII-1974 熊野
1-VIII-1974 猿飼
45. タニマノドヨウグモ 23-VIII-1974 便ノ山
46. ヤマジトヨウグモ 9-VIII-1972 三戸
47. ジョロウグモ 23-VIII-1974 便ノ山
12. カラカラグモ科
48. ヤマジグモ 23-VIII-1974 賀田
23-VIII-1974 便ノ山
1-VIII-1974 神前
13. アシナカグモ科
49. ヒメアシナカグモ 26-VIII-1973 紀伊長島 [O]
50. キララシロカネグモ (Leucauge subgemmea BOESENBERG et STRAND) VII-1971 紀伊長島 [X]
VII-1971 大内山 [X]
51. ハラビロアシナカグモ (Tetragnatha extensa LINNÉ) 29-VIII-1971 大白ヶ原
52. ヤサカタアシナカグモ (Tetragnatha japonica BOESENBERG et STRAND) 22-VIII-1974 神内
5-VIII-1972 鈴島 [O]
1-VIII-1974 猿飼
53. ミドリアシナカグモ (Tetragnatha pinicola L. Koch) 22-VII-1974 神内
23-VIII-1974 賀田
VII-1971 大内山
1-VIII-1974 猿飼
54. アシナカグモ 22-VIII-1974 熊野
25-VIII-1972 大島
23-VIII-1974 賀田
14. タナグモ科
55. ヤクグモ属 sp. 22-VIII-1974 神内 [X]
23-VIII-1974 賀田
31-VIII-1974 大内山
1-VIII-1974 神前
15. キシダグモ科
56. シノヒグモ (Cispius orientalis YAGINUMA) 22-VIII-1974 神内
22-VIII-1974 熊野

- 23-VII-1974 賀田
23-VII-1974 倭ノ山 [O]
57. スジブトハシリグモ
22-VII-1974 熊野
58. アオグロハシリグモ
(*Dolomedes raptor*
BOESENBERG et STRAND)
30-IV-1972 倭ノ山 (X)
59. イオウイロハシリグモ
22-VII-1974 熊野
1-VIII-1974 神前
60. アズマキシダグモ
(*Pisaura lama* BOESENBERG et STRAND)
25-III-1973 紀伊長島 [O]
16. コモリグモ科
61. キクツキコモリグモ
(*Lycosa pseudoannulata*
BOESENBERG et STRAND)
23-VII-1974 倭ノ山
10-VII-1973 紀伊長島 [O]
62. ハリケコモリグモ
23-VII-1974 賀田
29-VII-1971 天台ヶ原
27-VIII-1972 紀伊長島 [O]
1-VIII-1974 神前
63. ウツキコモリグモ
1-VIII-1974 神前
64. カイズクコモリグモ
22-VII-1974 熊野
65. キバラコモリグモ
(*Priata subpiraticus*
BOESENBERG et STRAND)
2-X-1973 紀伊長島 [O]
- 1-VIII-1974 猿飼
66. ヒノマルコモリグモ
(*Tricca japonica* SIMON)
22-VII-1974 神内
23-VII-1974 倭ノ山
17-IX-1972 紀伊長島 [O]
3-V-1972 大杉谷
17. カニグモ科
67. ハナグモ
22-VII-1974 神内
1-VIII-1974 神前
68. ユノハマハナグモ
31-VII-1974 大内山
69. ワカバグモ
22-VII-1974 神内
70. アサヒエビグモ
27-VII-1972 城ノ浜
71. シヤコグモ
1-VIII-1974 猿飼
72. トラフカニグモ
22-VII-1974 熊野
1-VIII-1974 猿飼
73. ヤミイロカニグモ
30-IV-1972 猿飼
18. ハエトリグモ科
74. テニツツハエトリグモ
23-VII-1974 賀田
75. マカネアサヒハエトリグモ
(*Jotus difficilis*
BOESENBERG et STRAND)
22-VII-1974 熊野 (X)

76. エキスハエトリグモ
(*Laufeia aenea* Simon)
5-VIII-1972 鈴島 [X]

77. オスクロハエトリグモ
22-VII-1974 熊野

78. ウスジハエトリグモ
22-VIII-1971 使, 山

79. キアシハエトリグモ
22-VII-1974 熊野

19. フクログモ科
80. アシナカコマチグモ
23-VII-1974 質田
23-VII-1974 使, 山

81. カバキコマチグモ
22-VII-1974 熊野
22-V-1971 質田
23-VII-1974 使, 山
1-VIII-1974 神前

82. イタチグモ
(*Itatsina praticola*
BOESENBERG et STRAND)
29-VII-1971 大台ヶ原
25-V-1973 紀伊長島 [O]

83. クラシマグモ属 SP
10-VI-1973 紀伊長島 [O]

84. オトヒメグモ
(*Orthobula crucifera*
BOESENBERG et STRAND)
22-VII-1974 熊野
30-IV-1972 使, 山
2-V-1973 紀伊長島 [O]

20. シボグモ科
85. シボグモ
22-VII-1974 熊野
23-VII-1974 質田
1-VIII-1974 神前

21. ワシグモ科 (Gnaphosidae)
86. チャクロワシグモ
(*Drassodes depilosus*
DOENITZ et STRAND)
2-V-1973 紀伊長島 [O]

87. メネリグモ
(*Gnaphosa kompirensis*
BOESENBERG et STRAND)
24-VII-1974 紀伊長島 [O]

88. ホシジロトンビグモ
(*Poecilochroa hosiziro*
YAGINUMA)
2-V-1973 紀伊長島 [O]

89. ケムリグモ属 SP
10-IV-1973 紀伊長島 [O]

・ 目録訂正分
誤

10. *Simonius typicus* KISHIDA ⇒ 10. *Spermophora meridionalis*
シモングモ ⇒ HENTZ ^正 *アツメユレイグモ* [O]
(アケホノユレイグモか?)

13. *Chryso argyrodiformis*
YAGINUMA オダカグモ ⇒ とり消し
17.

目録中◎印は八木沼氏, ○印は橋本氏, □印は田中氏
×印は松本氏の同定によるもの

以上の結果、三重県南部地方の真正蜘蛛類は、
29科 103属 189種となった。

(I-III-1975)

東亜蜘蛛学会第7回全国大会 三重県にて開催決定

昨年の6月、八木沼健夫先生の方から、三重クモ談話会へ「
会ができたことだし、来年度の全国大会をぜひ三重県でやってほ
しい」との話があった。突然のことでは、こんな大役がはたして果せるの
か、いろいろ問題がありそうだったが、とにかく、何とかしようということ
になった。そして昨年の8月に東京で開かれた第6回全国大会の
会場で正式に要請があり、橋本先生が、三重県の現状を
報告し、近隣の会員の方々に多大の御援助をいただくとい
う条件のもとに、精一杯努力するということになり、これをひきうける
ことになった。早速、太田、橋本、貝登のメンバーが津に集
まり、第1回の連絡会を開き、いろいろ検討した結果、
来る8月の24日(日)、25日(月)に一泊二日で津の洞津会館
にて行なうことには決定。近々、関西支部の皆様と第2
回の連絡会をし、8月の大会に向って準備にとりかかる予定
になっている。

詳しいことは追って連絡しますが、談話会の会員の方々に
も非常な御協力をお願いしなければならぬと思います。よろ
しくお願いいたします。また、絶好の機会でもありますので大会
にはぜひ参加していただきたいと思います。

昭和49年度決算報告

・収入の部 26,410円

会費 18,400円 (500円×35人分+300円×3人分)
 機関誌売上 510円 (200円+130円+180円. 郵送料を引く)
 寄付 7,500円 (太田定浩. 橋本理市. 貝發憲治. 各氏2500円ずつ)

・支出の部 25,191円

前年度機関誌製本・印刷代不足分 1,360円 (印刷屋の見込み分を物価高騰の為超過した分の)
 事務費 200円 (領収書用紙)
 送料・通信費 2,916円 (ハガキ・切手・電話代)
 本年度機関誌発行代 5,500円 (上質紙・表紙厚口色紙・製本代)
 前年度赤字分 16,215円

・差引 1,219円

昭和49年3月31日.
 上記の通り相違ありません.

貝發憲治

◎会費領収 (敬称略)

(昭和48年度) 石川佳男. 石原重昭. 太田定浩. 下市昇一.
 (昭和49年度) 山川要助. 北前芳幸. 橋本理市. 太田定浩. 貝發憲治
 孫福正. 川辺良一. 石川佳男. 下市昇一. 西川喜朗
 石原重昭. 松本誠治. 高橋米夫.
 (昭和50年度) 北前芳幸. 橋本理市. 太田定浩. 貝發憲治. 孫福正
 川辺良一. 水谷慶治. 石川佳男. 吉村亨. 西川喜朗
 石原重昭. 松本誠治.
 (昭和51年度) 北前芳幸. 太田定浩. 松本誠治. 橋本理市. 貝發憲治
 (昭和52年度) 北前芳幸. 松本誠治. 太田定浩. 橋本理市. 貝發憲治

編集後記

採集会の再三の計画も雨にたたり、また計画の不手際もあつて、結局、本年度は念としての借しは全然できなかった。反省することしきり、にもかかわらず、「しのびぐも第2号」へは5編もの投稿があり、会員の皆様の地道な研究ぶりかうかがわれ、うれしく思いました。来年度は談話会が発足してから3年目に入り、~~本誌~~ 大きく飛躍したいものです。

しのびぐも 第2号 1974

昭和50年3月25日印刷

昭和50年3月31日発行

編集兼発行者 貝登寛治

発行所 三重クモ談話会

三重県四日市河原田 四日市農芸高校内

TEL. 四日市 45-5021